



TITLE:

京大広報 号外 1

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 号外 1. 京大広報 1997, 9704g1: 199-208

ISSUE DATE:

1997-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209242>

RIGHT:



京大広報

号外

1997. 4

目次

〈卒業式・学位授与式〉

卒業式における総長のことば・・・・・・・・・・200

修士学位授与式における総長のことば・・・・204

博士学位授与式における総長のことば・・・・206

〈大学の動き〉

平成8年度卒業式・・・・・・・・・・208

平成8年度修士学位授与式・・・・・・・・・・208

平成9年3月博士学位授与式・・・・・・・・・・208

〈医療技術短期大学部の動き〉・・・・・・208

平成8年度医療技術短期大学部

卒業式・修了式・・・・・・・・・・208



平成8年度卒業式



平成8年度医療技術短期大学部卒業式・修了式



平成8年度卒業式

卒業式・学位授与式

卒業式における総長のことば

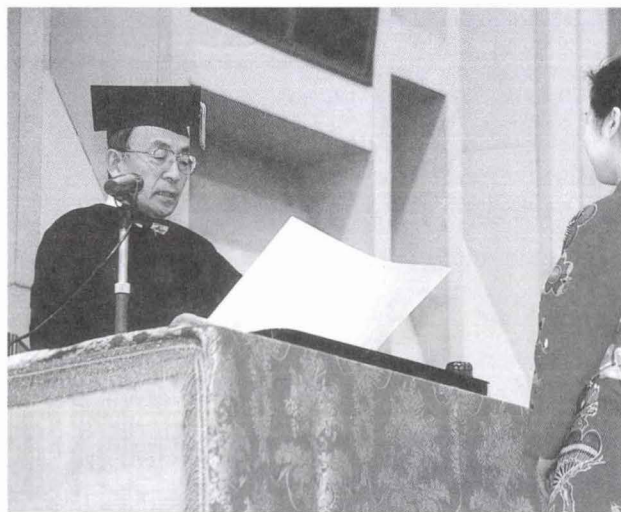
平成9年3月25日

総長 井村 裕夫

本日は来賓の諸先生をお迎えして、各学部長、教職員の出席のもと、平成8年度卒業式を挙行之、2,878名の諸君に学士の称号を贈ることができましたことは、京都大学として誠に喜びとするところであります。本年はとくに総合人間学部が、最初の卒業生89名を送り出す年であります。教養部改革の一環として生まれたこの学部は、人間の内面と、人間を取り巻く社会や自然を総合的に理解することを目的とした新しい構想の学部であり、将来の発展が大いに期待されています。

卒業生諸君、本日はおめでとうございます。京都大学入学以来4年間、医学部の場合には6年間の大学生活を終え、諸君はいま社会へのスタート台に立とうとしています。大学では大いに勉強した人もあるでしょうが、あまり勉強しなかったといささか忸怩たる思いを持っている人もあるのではないかと思います。しかし大学で学ぶべきこと、それは教室や研究室からだけでなく、様々な人々との交流を通して、すなわち広い意味でのキャンパスライフの中から得られるものも多いのであります。それらは京都大学百年の歴史の中から生まれた無形の文化、あるいは伝統と言うべきものであります。現在の諸君にそれが何であるかはわからないのではないかと思います。長い人生の中で必ずや思いあたることでしょう。私自身も大学を出て、他大学の出身者と一緒に仕事をする機会があったとき、初めて京都大学で学んだものが何であるか理解できました。そして私が独力で仕事をしなければならなかったとき、それは大いに支えになってくれたのであります。

先程から華やかな卒業式の雰囲気に入りながら、私は今から43年前、1954年京都大学を卒業したときの事を思い起こしていました。時の総長瀧川幸辰先生は卒業式の告辞の中で、次のように述べられました。「私は諸君に対して、他人からただの酒を御馳走になることを、自ら戒めることを希望します。今政治家の間で疑獄事件が起こっていることは、諸君も御承知のことと思いますが、疑獄事件の原因は、すべてただの酒を御馳走になる習慣から起るといっ



てよろしい。酒の好きな人が酒を飲むのはよろしい。しかしそれは、自分の銭で飲むことが絶対の条件であります」。

告辞の中の他の言葉を私はすっかり忘れてしまいましたが、「ただ酒を飲むな」というフレーズだけは、私の心の奥底深くに棘のように突きささって離れませんでした。もちろん厳密に言えば長い人生の中で、ただ酒を一度も飲まずに過ごせる人はほとんどないでありましょう。瀧川総長は、ただ酒の中には深い落とし穴があるものが多いので気をつけるよ、という意味で、やや象徴的に「ただ酒を飲むな」という言葉で表現されたものと考えます。この一言は、私の人生を通じて“けじめ”をつけることの重要さを教え続けてくれました。

瀧川総長の告辞にもあるように、当時は政治家の大きい疑獄事件が話題になっていました。権力の座にある政治家の汚職は古い時代からあり、戦後も繰り返り摘発されてきました。私たちは政治家の汚職には慣れっこになり、諦めていたように思われます。しかし最近では政治の世界にとどまらず、社会の各層に汚職、腐敗の現象が及んでいることを私どもは思い知らされることになりました。昨年亡くなった司馬遼太郎さんは「明治の役人というのは、いまから考えても痛々しいほど清潔でした」、と述べておられますが、日本の社会が大きく変わってしまったことに、慄然たる思いを抱かざるを得ません。そして汚職、腐敗は日本の社会の一部特殊な人々の悪徳のせいではなく、日本の社会の構造と私どもの生き方、考え方そのものに根ざしていると思われます。

私は他の動物に比して現代の人間は並みはずれて

強い所有欲を持っていると考えています。もちろん動物も生きるために縄張りを持ち、そのため争いを起こすこともあります。人間も長い進化の歴史の中で飢えに直面し、縄張り争いもしばしばしたであります。しかし、それらは食を得るためのものがあります。そして現在なお狩猟、採集生活をしている部族の調査によりますと、取った獲物は部族の中では一定のルールで配分されるのが一般的であるとのことですので、古い時代の人類も他の動物と同様強い所有欲は持っていなかったように思われます。私は人類学者ではありませんので間違っているかも知れませんが、人間が強い所有欲を持つようになったのは、農業や牧畜を始め、食糧や様々な財貨を貯えるようになってからではないかと考えます。そして貯えられた富は他者への支配力に転化し、そのためより多くの富の力を求めて、人々は相争うようになりました。

しかし人間の持つ強い所有の欲望を野放しにしては、もとより社会生活は不可能であります。人間は多くの大型野性動物に比し、甚だ力の弱い存在でありますので、共同作業なしに生き残ることは困難であったであります。そのため人類は宗教を生み出し、また道徳を育てて強過ぎる欲望を制御する努力をしてきました。宗教や道徳の規範を持たない民族は、恐らく地球上にないであります。

もちろんわが国にも伝統的な宗教や道徳・倫理がありました。しかし、それらは国民を戦争に駆りたてるため悪用されたこともあって、戦後過度に否定されてしまいました。私たちは新しい道徳・倫理を確立しないまま、経済復興に向けて猛進しました。戦争によって焦土と化したわが国で、多くの人間が生き残るためには、経済復興第一主義はやむを得ない選択であったかも知れません。しかしその結果として宗教も道徳・倫理も貧弱なままで、経済面のみが肥大化することとなってしまいました。経済行為あるいは市場経済も、本来その社会の文化、宗教、道徳、倫理に支えられてこそ、公正に機能する社会活動の一部と考えられるのであります。そうした人間社会のあり方への省察を欠いたまま、日本人はひたすら経済的な豊かさを追い求めてきました。エコノミック・アニマルという批判が生まれた所以であります。政治もまた欲望を充足させるための具とな

ってしまいました。選挙民は自分の住む地域に道路や橋を作ってくれる政治家を、補助金を獲得し、利益誘導をしてくれる政治家を求め、政治家も当選するためにそれに迎合しました。その結果、利権を求めて私腹を肥やす人々が増えました。欲望民主主義とでも呼ぶべき状況となったのであります。そしてバブル経済が起こり、当然のことながらそれは破綻しました。後に残されたものは、汚職、腐敗という社会現象であります。

先に触れた司馬遼太郎さんは、土地が投機に使われることを強く懸念し、晩年は土地問題について盛んに発言をされました。私たちがその上に住み、生きるための食糧を得、そして共存すべき自然が豊かにある土地までが、欲望の対象となってしまったことに、司馬さんは強い憤りを覚え、モラルの崩壊とそこから来るわが国の滅亡を危惧しておられたのであります。

司馬さんの危惧の通り、現在のわが国は危機的な状況であると私は考えています。私は政治が混迷し、膨大な財政赤字を抱え、経済が停滞している、といった現象面のみを捉えて、わが国が危機的状況にあると言わんとしているではありません。そうした現象面の根底には、日本人の多くが、志を失ってしまったという憂うべき事実があると考えからなのです。私利・私欲を離れ、日本の将来のため、人類の未来のため、困難があってもそれを乗り越える努力ができなくなっていると考えからであります。志とは夢と先見性を持ち、未来に向けて道を切り拓く実行力と勇気を持つことと言ってよいであります。そのためには自主独立の精神が、そして私利・私欲を離れた公共心が必要であります。

現在のような混迷の時期こそ、われわれは歴史に学ぶことが必要であります。今から130年ほど前、わが国は明治維新という一種の大革命を行いました。その中でわれわれの先祖が成し遂げたことの大きさは、驚くばかりであります。例えば1871年には、廃藩置県が行われました。これは藩が、従って武士階級が持っていた特権を奪い、これを国家のものにするという大革命でありました。この時、武士階級が既得権をいわば自己放棄することになったのは、あるべき未来社会の実現を志した下級武士たちの力であります。彼らは、自らの利益を犠牲にしても新

しい国家を作り、世界の潮流に対処すべきであるという、ストイックな使命感、倫理感を持っていたからでありましょう。

明治初年の日本人は、高い志を持って新しい国家の建設に努力しました。廃藩置県が終わったその年に、政府の首脳は2年近くの欧米視察の旅にでます。いわゆる岩倉使節団であります。国家の基礎がまだ固まらないこの時期に、敢えてこのような壮挙を敢行したのは、国家百年の計を建てたかったのでありましょう。事実明治日本のかたちは、この使節団の成果を基礎として出来上がりました。困難な状況下での旅行であったからこそ、使節団は案内人が音を上げるほど熱心に様々な問題に関心を持って見学しました。教育もまたその一つでありました。教育こそ、国家百年の計の基本であることを、使節団の人々は知っていたのでありましょう。事実その後のわが国では、苦しい経済状況の中で全国に小学校を作り、初等教育の普及に努めました。また高給で雇い外国人教師を迎え、高等教育をわが国に移植しました。更に有為の青年を多数外国に留学させ、様々な分野の専門家の育成に努めました。僅か6歳の津田梅子が、アメリカ留学をしたあたりにも、明治期の日本人の旺盛な自立心と、高々とした志を見ることができます。

志のある為政者は、地方にも存在しました。東京遷都により衰微した京都を再生させるべく、多くの人々が努力しました。その中で特に功績の大きかったのは、第三代の京都府知事であった北垣国道であると私は考えています。彼の事績の一つは、琵琶湖疏水の完成であります。工部大学校を卒業したばかりの、若冠23歳の田辺朔郎を主任技師として雇い、全てを彼に託してこの難事業を成功に導きました。北垣知事が偉かったことは、この事業を政府のものとせず、京都府の事業としたことです。政府の補助も得ましたが、京都府民に当時の金で65万円にものぼる負担を求めました。これは現在の貨幣価値にすると450億円を越える額であったとされています。北垣知事は府民が力を合わせてこの事業を成功させることにより、衰微した京都が再生できると考えました。彼は病気で休んでいるときも市民を公邸に招いて説得し、遂にこの大事業を成し遂げました。誠に凛とした自立心、自助の精神であると言わねばな

りません。

北垣知事のいま一つの業績は、京都に第三高等中学校を誘致したことであります。北垣知事が京都に来た明治14年当時、大学は東京にしかなく、大阪には大阪中学校がありました。この大阪中学校が明治19年に高等中学校になった当時、全国に五つしか高等中学校はありませんでした。大阪城の近くにあった第三高等中学校は、屋舎も狭く、教育環境も良くなかったため、適当な場所への移転が計画されました。その時北垣知事は京都への誘致に大変熱心で、愛宕郡吉田村、現在の京都大学本部地区の土地を提供しただけでなく、創立費10万円の寄付を申し出ました。これは、現在の金で70億円ぐらいと換算されますが、総予算が少なかった当時では破天荒な高額でありました。従って京都府議会はこのことに強く反発し、大変粉糾したとのことであります。結局京都を学問の都としたいという北垣知事の熱意が通って、10万円の寄付が決まり、明治22年第三高等中学校は京都吉田の地へ移転することとなりました。その後わが国第二の帝国大学を関西に作ることが決まった時、当然のように京都が選ばれました。大学予備門の役割を果たす第三高等学校（明治27年に改称）が京都にあったからであります。もし第三高等学校が大阪にあったなら、恐らく帝国大学も大阪に設置されたでありましょう。従って本年百周年を迎える京都大学は生まれなかったことになります。明治以来、京都には京都大学を中心に多数の大学が生まれ、現在も人口の比率では最も大学の多い町、学問の都となったことを考えますと、北垣知事の功績は大変大きいと言えます。明治の人の志の高さに、改めて敬服せざるを得ません。

明治時代と現在では、状況は大きく異なっています。明治時代は封建制度を打ち破り、近代国家を建設するというわかり易い目標があり、欧米の国家というモデルもありました。しかし現在のわが国には、追いつけばよいという簡明直截な国家モデルはもはや存在しません。しかも現代は全世界が文明の大きい転換期にさしかかっています。十九世紀以来続いた国民国家は変貌を迫られ、人、金、情報の激しい交流によって国境は見えにくくなり、しかも民族の対立は激化の傾向を示しています。科学文明は一層進歩の速度を速めています、それによって地球環

境は危機的状況を迎えるようとしています。こうした状況を前にして、地球環境の保全と人間の生存を確保するための新たなルールを作ることを求められています。経済大国と言われるわが国も傍観的立場をとることは許されません。しかしわが国はこうした国際的要請に応えうる状況にあるのでしょうか。むしろ社会の全ての分野が閉塞状況に陥り、未来の国際社会の中でのわが国のあるべき姿が見えなくなっているように思えてなりません。明治維新の頃よりは、はるかに複雑で、不透明な状況であると言ってよいでありましょう。この閉塞状況を打ち破り、新しい地平を開くことができるもの、それは明治維新の時と同様に若い力であると私は信じています。

京都大学を卒業した諸君は、今後社会の様々な分野で活躍し、指導的な地位に立つ人が多いと思います。そのことは諸君の能力と努力の結果でありますから、当然のことであると言えます。そのような立場に立つであろう諸君に、私が申し上げておきたいことが二つあります。その一つは高い志を持って、すなわち時代を先見しながら勇氣を持って行動してほしいということであります。名利を求めず、保身に走らず、常に自分が正しいと思う道を歩んで下さい。それによって諸君は新しい時代を開く旗手となりうるでありましょう。第二は緊張した倫理観を終生持ち続けてほしいということであります。社会に出ると様々な付き合いがあり、つい緊張を失い勝ちになりますが、ただの酒には大きい陥し穴がありうることを、ただのゴルフも大変危険であることを常に肝に銘じ、けじめを失わないようにして下さい。凜然とした道義観を持ち続けること、それは必ずしも容易なことではありませんが、それを成し遂げてこそ諸君は新しい日本の担い手になりうるのです。

最後に京都大学の卒業式の恒例になってしまったパフォーマンスについて少し述べておきたいと思います。毎年の卒業式に見られる縫いぐるみや女装などに不快感を持ちながらも、私は稚氣を咎めることは大人気ないと考えて黙ってきました。しかし卒業式は英語でコメントと呼ぶように、社会人として、あるいは学者としての始まりの儀式であります。それは学生時代の甘えを棄て、自らの行動に責任を負うという凜とした宣誓の式であると言っても

よいでありましょう。この厳粛な青年の心の誓いに応えるため私は襟を正してこの式に臨んでいるのであります。変装している諸君が、そのままの服装で入社式にあるいは自分の結婚式に出席するのなら、私は何も申しません。もしそうでないのなら、卒業式では社会人としての「けじめ」をつけてほしいと思います。

おめでたい卒業式に、若干苦言を呈してしまいました。しかしそれも諸君が自立心に富み、自己責任と道義感を持った立派な日本人として、わが国の、そして世界の未来の担い手になってほしいと願うからであります。諸君こそは二十一世紀世界の住人です。そこには様々な不安や、困難がありましょうが、若い力はそれらを乗り越えて新しい時代を開いていくでありましょう。どうか春の空のように高い志を持って、そして自らを重んじ自らの責任を大切にしながら、希望に充ちた未来に向けて歩んで下さい。諸君の前途が、幸い多いものであることを祈って私の式辞と致します。

修士学位授与式における総長のことば

平成9年3月24日

総長 井 村 裕 夫

本日ここに来賓の諸先生をお迎えして、各研究科長、教職員の出席のもと修士学位授与式を挙行し、1592名の皆さんに修士の学位を授与することができましたことは、京都大学として誠に喜びとするところであります。志を立てて大学院に入学されてから今日までの皆さんの御努力に敬意を表するとともに、所期の目的を達成して修士の学位を得られたことに心からのお慶びを申し上げます。

本日修士の学位を得られた皆さんの中には、女性が240名含まれていました。女性の修士が、年々増加して行くことは、大変喜ばしいことであります。そこで本日は女性と学問について、最近感じていることの一端をお話ししたいと思います。事の始まりは、去る1月20日、平成8年度朝日賞受賞式に出席したときのことであります。待ち時間に現在までの朝日賞受賞者のリストを見ながら、ふと女性は何人かということに興味を持ちました。朝日賞は昭和4年、1929年に始まり、学問、芸術、社会活動など、文化の面で大きい業績を挙げた個人、あるいは団体を顕彰する賞であります。現在までに個人としては367人が受賞しておられますが、女性は14名に過ぎませんでした。しかもそのほとんど全てが、演劇、絵画、ファッションなどの芸術の分野での受賞であって、学問の分野では235人中1人もありませんでした。

現在までの日本学士院賞受賞者はエジンバラ公賞も含めて合計738名ですが、女性はそのうち5名で1%にもなりません。5名のうち4名は共同受賞であり、単独で受賞された方は1名のみであり、女性が少ないことは明らかであります。

それではノーベル賞はどうかを調べてみますと、1901年に始まったこの賞の自然科学の分野での女性の受賞者は僅か10名で、2%にも達しません。分野別に見ると物理学賞2名、化学賞3名（うち1名は物理学賞も受賞したマリー・キュリー）、生理学・医学賞6名で、生理学・医学賞が過半数を占めています。因みに1969年に始まったノーベル経済学賞、1936年に始まった数学のノーベル賞と言われるフィールズ賞にも女性の受賞者は見あたりません。

学問以外の芸術やその他の文化の面では女性が華々しく活躍しているのに、何故学問の分野で女性の活躍が少ないのか。その理由として、1964年度のノーベル化学賞を得たドロシー・ホジキン＝クロウフットは、「歴史的な背景の故で、女性の才能が劣っていることによるのではない」と述べています。たしかに今世紀の前半には、学問の世界への女性の参加は欧米でもまだ極めて困難で、ノーベル賞を受賞した女性学者も、最初は大学等で職を得ることに大変苦労しています。例えば1977年にノーベル生理学・医学賞を受賞したロザリン・ヤロウ博士は私自身個人的によく知っていますが、1945年大学院の博士課程を終えても大学に職がなく、連邦電信実験所の技師となり、次いでブロンクスの病院でパートタイムの技師として研究に従事し、3年後にやっと正式の職を得ています。女性が男性と同様に大学等で研究職につけるようになったのは、アメリカでもおそらく1960年以降のことでありましょう。一方わが国では1945年までは、東北大学を除いて旧帝大へは女性は進学すらできませんでした。

第二の理由は、女性の場合これまでは結婚をすると家事、出産、育児などに手を取られ、研究の続行が難しくなる時期があったことであります。10人の女性のノーベル賞受賞者のうち3人は生涯独身でありましたが、他の7人は結婚し子育てもしています。しかしそのためには大変大きな努力を払ったことは疑いがありません。1963年ノーベル物理学賞を受賞したマリア・ゲッパート＝メイヤーは、「結婚している女性が職業人としての経歴を断念する理由は本当はないのです。たとえ数年間、子供が小さい間活動できないにしても、少なくとも自分の研究分野との接触を保ち、そして新しい発展と進歩についてゆくべきです。そうすればいつでも仕事を再開できるでしょう」と述べています。また彼女は「結婚した女性科学者には理解のある夫が必要です」とも言っています。

このように女性が従来学問の世界で十分活躍できなかったのは、男性中心で作られてきた社会に原因があったことは疑う余地はありません。出産、育児のため女性が休むことは昇進の面で著しく不利でありました。今後は休んだ後の復職を容易にするとともに、復職後、業績を挙げれば速やかに昇進できる

体制を作り上げて行かねばなりません。

従って私には学問をする能力に、男女間で基本的に相違があるとは考えられません。もちろん私は人間の脳の持つ様々な高次の機能、記憶、認知、統合、感情、意志など全ての面で、全く性差がないと言おうとしているわけではありません。長い人間の歴史の中で作られてきた性差以外に、人間の脳の構造や機能に性による相違があるという報告もあります。それらは今後科学的な研究によって、一層詳しく解明されねばならない課題であります。しかしたとえ脳の機能に何らかの性差があるとしてもそれは学問的な能力と特に関係があるものとは考えられません。

そこで、移動する遺伝子トランスポゾンが発見で女性としては初めてノーベル生理学・医学賞を単独で受賞したバーバラ・マクリントックについて述べてみたいと思います。マクリントックは1927年コーネル大学で博士号を取得しましたが、女性ゆえ定職が得られず、助手も弟子もなく、たった1人で研究をしなければならませんでした。彼女は斑入りトウモロコシに注目しその遺伝を染色体のレベルで精細に研究しました。そして1950年、転移する遺伝子を発見し、学会で発表しました。しかし彼女の理論が革新的で難解であったためか、平素から変わり者と考えられていたためか、全く顧みられることなく、不遇の年月を過ごしました。しかし1960年代の終りになって、細菌などで転移する遺伝子（jumping gene）が見出され、彼女の研究が再発見されました。

マクリントックの伝記を書いたエヴリン・ケスラーは、彼女は自然の秩序の持つ複雑さ、奥深さに畏敬の念を持ち、実験は自然に語らせるもので、対象に耳を傾ける姿勢が必要であると考えていたと指摘しています。斑入りのトウモロコシを例外として棄てず、その違いを探究することによって重要な発見に到達したわけです。

今日は女性と学問について、最近考えたことの一部をお話ししました。従来学問の世界では男性が優遇されて参りました。しかし今後は男女が切磋琢磨しながら、学問の発展にともに貢献して行かねばなりません。

今日修士の学位を得られた皆さんの中には博士後期課程に進学して、更に研究を続ける人、また大学

以外の研究機関で研究に従事する人が多いでありましょう。また今日まで学んだ専門知識を基礎にして、社会の様々な分野で活躍する人も、かなり多いと思います。いずれにせよ学問に深く関わりながら、これからの人生を歩まれることは確実であります。二十一世紀は知識の時代、知識や情報が価値を生む時代であります。皆さんの活躍なしに、わが国の将来はないと言っても過言ではありません。皆さんは、生涯学ぶことを怠らず、それぞれの立場で学問の発展のため、人類の未来のために努力して下さい。皆さんの活躍を祈念して、私の挨拶と致します。

博士学位授与式における総長のことば

平成9年3月24日

総長 井村 裕夫

本日ここに各研究科長、教職員の出席のもと学位授与式を挙行し、課程博士313名、論文博士134名、合計447名の方々に博士の学位を授与しましたことは、京都大学として誠に喜びとするところであります。

新博士の皆さん、本日はおめでとうございます。志を立てて研究を始めて以来、様々な困難や障害があったことと思いますが、それらを乗り越えて今日の日を迎えられたことは、皆様の強い意志と撓ゆまぬ努力の結果であります。それを忘れず、今後様々な分野で活躍してほしいと願っています。

さて、皆さんは学位を取得するにあたっては、様々な形で研究の評価を受けて来たと思います。研究がまとまったとき、これが博士の学位に値するものかどうか、まず指導教官の評価があります。次に論文を学術雑誌に投稿しますと、ほとんどの学術雑誌でピア・レビューがなされます。すなわち専門家であるレフェリーが2、3人ついて、その論文に多くの場合極めて適切な、時にはやや意地悪な評価をして、その論文がその雑誌に掲載する価値があるか否かの判断がなされます。最後に論文を学位を請求するため提出しますと、調査委員や専門委員がその論文を読んで評価をします。公開講演会が開かれる場合もあります。このように何段階かの評価を経て、皆さんは学位を得られたわけでありです。

それでは何故これ程手間隙をかけて評価がなされるのでしょうか。それは現在では学者の集団である学界があり、その学界で一定の評価を得ることによって初めて学術研究の専門家、すなわち学術研究を生活の糧としうる学者として認定されるからであります。この認定を得、しかもできるだけ高い評価を得るため、研究者は成果を論文にまとめ、なるべくなら有名な、それだけに評価の厳しい雑誌に発表しようと努力します。

このような状況が生まれたのは、それ程古いことではありません。例えば十八世紀の後半、水素の発見や地球の密度の測定など、化学と物理の領域で多岐にわたった研究で有名なヘンリー・キャヴェンディッシュは、生涯に18編の論文をロンドン王立協会

の機関紙に発表しています。しかし未発表の原稿は大変多く、それらが従兄弟の孫の手を経て、半世紀後にケンブリッジ大学のキャヴェンディッシュ研究所の初代所長となったジェームス・マクスウェルに贈られました。この未発表の原稿を読んだマクスウェルは驚きました。それは「クーロンの法則」、「オームの法則」、「ファラデーの誘電分極現象」と言った電気物理学に関する大発見が、それより早くキャヴェンディッシュによって見い出されていたからであります。

マクスウェルは、そこでキャヴェンディッシュの原稿に従って、それらの実験を一つ一つ再現しました。そして5年をかけてこれらの研究がすべて正しいことを確認しました。大天才のマクスウェルが貴重な時間をかけて再現しようとした程、その驚きは大きかったのでありましょう。

キャヴェンディッシュはイギリスの裕福な貴族の家に生まれました。彼が研究を行ったのは、未知の世界を解明したいという知識欲のためであって、生活のためではなかったのであります。事実科学の研究に従事して生活をする「科学者」が生まれたのは十九世紀の中頃からで、scientistという言葉もW・ヒューエルによって、この頃に作られたものであります。それまでの学者は、すべて学術研究を飯の種にしないアマチュアであり、知識を純粹に求めるフィロソファーであったわけでありです。

このようにして生まれた科学者は、一般の人々から、フィロソファーからも仲々認められない存在でありました。従って彼らはギルドにあたる専門学会を形成しました。そして、その学会に口演の形で、あるいは論文の形で発表し、評価を受けることによって、初めて専門の学者と認められるようになりました。

このようにして、ピア・レビューという制度が次第に確立してきたわけでありましたが、それではこの制度が万能かと言うと、決してそうではありません。現在の学問のパラダイムの中で、何か新しいものを付け加えるような研究であれば、評価は比較的容易に、また確実に出来ます。しかし新しいパラダイムの発端になるような研究は仲々評価できないことが多いのであります。

ロザリン・ヤロウは、微量物質の新しい測定法、

ラジオイムノアッセイの開発により、1977年ノーベル生理学・医学賞を受賞しました。彼女が、早逝したためノーベル賞を受賞できなかったソロモン・バーソンと新しい測定法の開発へと導かれたのは、ピア・レビュー制度の影響であります。核医学の草創期に、放射性同位元素で標識したインスリンの体内動態を研究していた二人は、インスリンの治療を受けている患者では、インスリンの代謝が遅いことを発見し、インスリン治療で抗体ができたためと結論しました。しかし当時はインスリンのような比較的小分子の（分子量6000）の蛋白には抗体ができないというのが免疫学の常識でありましたので、二人の論文はレフェリーによって厳しく批判され、編集主幹によって掲載を拒否されました。そこで二人は、インスリンを結合しているのが抗体であることを証明しようとして様々な研究をしている過程で、抗体を用いるインスリンの測定法を考案したわけであり、レフェリー制度の怪我の功名というべきでありましょう。

このように、駿馬を見出す伯楽の眼を持つことは凡人には難しく、ピア・レビュー制度にも欠点がありますが、現在持ち得る次善の方法として、これが論文の評価のみでなく、研究者の就職、昇進、研究費の配分、研究機関の評価など、いろんな場面で用いられるようになって参りました。

そして現在、評価には新しい側面が生まれてきています。それは研究には益々お金がかかるようになってきたこと、それに反して国家の財政が逼迫してきたことによります。そのため限られた学術研究の資源の有効活用が社会から求められるようになってきました。更にタックス・ペイヤーの立場から、ピア・レビューだけでなく一般人の参加も求める動きが出て参りました。これは止むを得ないこととはいえ、大変危険な側面も持っている動きであります。

学術研究は、本来知への愛に動かされて研究者が行う行為でありますので、研究費を出しても性急に結果を評価すべきでないと言えます。新しい学問のパラダイムが開かれたとき、ふり返ってみると必ずそれに到る伏流があり、伏流はその時点では評価されないことが多いのであります。しかし現在のように、研究者がわが国だけでも数10万人もいる時代になると、とてもおおらかに研究費を配分するこ

とは不可能になってきています。

私どもは現在学術研究の評価の方法を確立する必要性に迫られています。それは研究者の自由な発想を抑制したり、新しい研究の芽を摘んだりするものであってはいけません。それは良い研究をエンカレッジするものでなければならないわけであり、更に短期的に見るのではなく、長期的な視点も評価には求められます。そのためには客観評価（例えば論文の発表雑誌や引用回数）のみでなく、主観的评价も必要になって参ります。そして、それをうまく行うためには、すぐれた評価者と、その人達を支援する評価のための組織の育成をしなければならない状況となって参りました。それと同時に評価の結果を一般に広く発表し、タックス・ペイヤーの理解を求めていく努力も大切であります。

キャヴェンディッシュの時代からマクスウェルの時代、更にピア・レビューの制度が確立したヤロウの時代、それは現在でもそうありますが、そうした時代を経て今後は更に組織的な評価の時代へと移行していくように思われます。私達研究者は一方では学問の自由を守り、独創的な研究の育成につとめながら、他方では資源の有効活用を考え、社会の批判にも応えねばならないという難しい時代に直面しています。

今日学位を得られた皆さんの中には、今後とも自分で研究をしたり、若い研究者を指導したりする方が多いと思います。また自身の研究を評価されたり、他人の研究を評価する立場に立つこともありましょう。学術研究の評価のあり方についても、是非考えてほしいと思います。皆さんの一層の活躍をお祈りして、私の挨拶と致します。

大学の動き

平成8年度卒業式

3月25日（火）午前10時から、総合体育館において名誉教授をはじめ部局長等の出席のもとに平成8年度卒業式が挙行された。

京都大学音楽部交響楽団、京都大学合唱団による学歌斉唱の後、総長から、各学部代表に学位記が授与された。

続いて、総長の式辞があり、最後に「蛍の光」を全員が合唱して、午前11時10分に終了した。

本年度の新学士は、総合人間学部89名、文学部223名、教育学部83名、法学部428名、経済学部268名、理学部290名、医学部89名、薬学部90名、工学部982名、農学部336名、の計2,878名であった。

平成8年度修士学位授与式

3月24日（月）午前10時から、総合体育館において名誉教授をはじめ研究科長等の出席のもとに平成8年度修士学位授与式が挙行された。

総長から各研究科修了者代表に、学位記が授与された後、総長の式辞があり、午前10時40分に終了した。

本年度の修士課程修了者は、文学研究科88名、教育学研究科28名、法学研究科63名、経済学研究科54名、理学研究科252名、薬学研究科60名、工学研究科736名、農学研究科207名、人間・環境学研究科104名の計1,592名であった。

平成9年3月博士学位授与式

3月25日（火）午後1時から、総合体育館において、各研究科長をはじめ総合人間学部長、学生部長、事務局長出席のもと、平成9年3月博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記が手渡された後、総長の式辞があり、午後2時25分に終了した。

本年3月の学位授与数は、課程博士313名、論文博士134名の計447名であった。

各研究科別内訳は次のとおりである。

文学研究科31名（18名、13名）

教育学研究科5名（1名、4名）

法学研究科3名（1名、2名）

経済学研究科12名（6名、6名）

理学研究科84名（79名、5名）

医学研究科107名（83名、24名）

薬学研究科16名（16名、0名）

工学研究科124名（69名、55名）

農学研究科54名（30名、24名）

人間・環境学研究科11名（10名、1名）

※（ ）内の前の数字は課程博士、後の数字は論文博士を示す。

医療技術短期大学部の動き

平成8年度医療技術短期大学部 卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月17日（月）午前10時から、本短期大学部講堂において来賓の臨席のもとに、短期大学部卒業式及び修了式を挙行了。式は卒業証書・修了証書授与、学長式辞、来賓祝辞と進行し、午前11時終了した。卒業生は、

看護学科71名、衛生技術学科42名、理学療法学科17名、作業療法学科21名で、修了生は、専攻科助産学特別専攻18名の計169名であった。

（医療技術短期大学部）